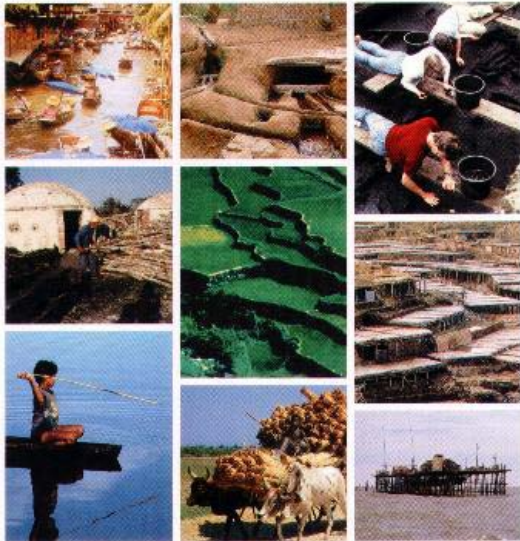


02.02.02

World Wetlands Day

Journée mondiale des zones humides

Día Mundial de los Humedales



The cultural heritage of wetlands.

Le patrimoine culturel des zones humides.

El patrimonio cultural de los humedales.



ラムサール条約 情報集

湿地の 文化遺産

The Convention on Wetlands, signed in Ramsar, Iran, in 1971, is an intergovernmental treaty which provides the framework for national action and international cooperation for the conservation and wise use of wetlands and their resources, as a means to achieving sustainable development throughout the world. As of 1st September 2001, there were 127 Contracting Parties to the Convention, with 1950 wetland sites, totaling 82.4 million hectares, designated for inclusion in the Ramsar List of Wetlands of International Importance.

La Convention sur les zones humides, adoptée à Ramsar, Iran, en 1971, est un traité intergouvernemental qui constitue le cadre des actions nationales et de la coopération internationale en matière de conservation et d'utilisation rationnelle des zones humides et de leurs ressources, comme moyens de parvenir au développement durable dans le monde entier. Au 1^{er} septembre 2001, la Convention comptait 127 Parties contractantes, ayant inscrit 1950 zones humides sur la Liste Ramsar des zones humides d'importance internationale. Ces zones humides couvrent, au total, une superficie de 82,4 millions d'hectares.

La Convención sobre los Humedales, adoptada en Ramsar, Irán, en 1971, es un tratado intergubernamental que brinda el marco para la acción nacional y la cooperación internacional destinadas a la conservación y el uso racional de los humedales y de sus recursos, como un medio para el logro del desarrollo sostenible en todo el mundo. Al 1^o de septiembre de 2001, 127 países se han adherido a la Convención, los que han incluido 1950 humedales, que abarcan unos 82,4 millones de hectáreas, en la Lista de Humedales de Importancia Internacional, o Lista de Ramsar.

HUMEDALES



The 20th Conference of the Parties to the Ramsar Convention will be held from 18-20 November 2002 in Valencia, Spain, with the theme "Wetlands: water, life and culture".

La 20th Conferencia de Partes contratantes a la Convención de Ramsar será el 18 de noviembre de 2002 en Valencia, España, con el slogan "Las zonas húmedas: vida, la vida y la cultura".

La 20th Conferencia de las Partes en la Convención de Ramsar tendrá lugar del 18 al 20 de noviembre de 2002 en Valencia, España, bajo el lema "Humedales: agua, vida y cultura".

The Ramsar Bureau
Bureau Ramsar
Oficina de Ramsar

St. Marysney 28
CH-106 Gland
Switzerland
Tel: +41 22 300 1171
Fax: +41 22 300 0169
E-mail: ramsar@unep.org
Web site: www.ramsar.org



Financed through the Ramsar 2002 Project
Financé par le Fonds Ramsar 2002
Financiado por el Proyecto Convenio Ramsar

5th Edition, October 2001

謝辞

世界湿地の日のために本シートを準備するにあたり，条約事務局では，考古学や民族生物学，湿地生態学の研究者，世界の信仰的リーダーとともに保全に取り組む人々，世界遺産条約のアドバイザーなどからの専門的知識や，湿地に関連する文化遺産の多面的な性質についての本質的な証言を求めた．

条約事務局は特につぎの個人ならびに団体に対して，この情報集の準備に惜しみない援助をいただいたことを感謝したい：

Bryony Coles 教授，英国エクセター大学考古学部，
Jorge Cruz 博士，バレンシア民族学博物館，スペイン，
Mohammed El Ayadi 博士，バレンシア大学地中海湿地研究本部（SEHUMED），スペイン，
Rolf Hogan 氏，IUCN，
Maryland Morant 女史，SEHUMED，スペイン，
Richard Prime 氏，英国信仰保全同盟（ARC），
Maria José Viñals 博士，SEHUMED，スペイン，および，
スペイン環境省．

条約事務局はまたさまざまな方法で援助いただいた次の方々や機関に謝意を表わす：

Maria Anagnostopoulou 博士，ギリシャピオトープ湿地センター，
Oscar Andreu 氏，SEHUMED，スペイン
Jim Corven 氏，西半球シギチドリ類保護区ネットワーク（WHSRN），米国，
Tim Dodman 氏，国際湿地保全連合アフリカプログラム，セネガル，
Asuncion Garcia 女史，バレンシア民族学博物館，スペイン，
Hans Joosten 博士，グライフスヴァルト大学，ドイツ，
Denis Landenbergue 氏，WWF インターナショナル，スイス，
Julia Langer 女史，WWF カナダ，
Adrian Olivier 博士，欧州考古学評議会，ベルギー，
Martin Palmer 氏，ARC，
Raymond Pouget 氏，旧北区西部渡り鳥協会（OMPO），フランス，
Maria Sanchez 女史，SEHUMED，スペイン，
Steve Szabo 氏，オーストラリア環境省，
高橋 妙子 女史，財団法人 地球環境戦略研究機関，
Harri Vasander 博士，ヘルシンキ大学泥炭地生態学研究グループ，フィンランド，および，
WWF ブラジル．

世界湿地の日のためのこのすばらしい資料は，ダノン・グループのエビアン・プロジェクトの資金提供を受けて作成された．

もくじ

湿地と人々の歴史

太古より食物や原材料の供給源だった湿地

湿地で働く - 仕事の手段

文化遺産 - その管理への挑戦

湿地 - 文化的景観

世界遺産条約と文化的景観,そして湿地

湿地 - 学習と余暇のための文化的景観

湿地と精神生活

湿地 - 芸術や文学,民俗的着想

湿地の文化遺産とラムサール条約

考古学によれば人々と湿地のあいだには古来より密接な関係があったことがわかる。世界中で浸水土壤に見つかる文化遺物は、人々が湿地を広範に利用し、限りなく豊かな湿地の天然資源が何千年ものあいだ人類を支えてきたことを証明している。今日も全ての国において、このような密接な関係を保ち、湿地における循環のリズムに従って人々の日々の暮らしが行なわれている社会がある。

もちろん、このような湿地と人々との関係は、その天然資源の価値や必須の生態系サービスに限られない。たとえば時代とともに発達してきた豊かな文化遺産も含まれる。それは湿地の保全と賢明な利用に関係する広範な湿地社会がいつそう大きな関心を払うに値する遺産である。

このような遺産の範囲や多様性は過小評価されるべきではない。ラムサール条約登録湿地の最近の分析によれば、それらのほぼ半数に莫大な量の多様な文化遺産が記録されているのだから。形態も次のようにさまざまである：人工的構築物や工芸品から、堆積物や泥炭の古生物学的記録、特別な信仰的意義を持つ場所、人々の暮らしを支えて独得の湿地景観を形成してきた伝統的な水利用や土地利用の管理方法まで。

製塩や米作、マングローブ利用、漁業、ヨシ刈り等に利用するために人々が発達させてきた伝統的な湿地管理技術の多くは、人々を支えつつ湿地も保全する技術として時の試練を耐えてきたものである。これらの成功した技術を



EDWARD PARKER

マミラウア保護区(ブラジル)の投げ槍漁。ここでは伝統的知識が保全管理プロセスの重要な役割を担う。

可能な限り維持することが、湿地と結びついた文化遺産と湿地自体を守ることにつながる。実際、これらの技術を、その背景にある伝統的知識とともに維持することが、生物多様性保全の重要な鍵となるツールであると、広く認識されている。



湿地の植物であるサゴヤシの幹からでんぶんをとる加工作業。パプアニューギニア。

ROGER JAENSCH, WETLANDS INTERNATIONAL

多くの都会人には湿地との直接的な関係は失われている。しかし、湿地の文化遺産は過去からのつながりを象徴し、また湿地の文化的景観は世界中の都会人を惹きつける漠然とした感覚を、同様に芸術家や作家には着想を提供している。

湿地の破壊や伝統的な管理方法の喪失は、洪水調節や地下水補給、栄養塩類の循環など

目に見える湿地の価値だけでなく、湿地の文化遺産をも喪失することを意味している。

2002年のラムサール条約の世界湿地の日は、湿地の文化遺産に焦点を当て、湿地の自然の価値と機能と同様に、これら遺産を守るための管理戦略の必要性に焦点を当てる。本ファクトシートでは、私達の湿地における文化遺産のさまざまな側面を見てゆき、文化的な課題を湿地の賢明な利用とそのための管理方法に統合するための手引きのいくつかを紹介する。その手引きは「湿地：水、生命及び文化」をテーマに開催される第8回締約国会議（2002年11月スペイン・パレンシア）で検討されるものである。

2002年の世界湿地の日のために本ファクトシートを準備するにあたり、条約事務局では、考古学や民族生物学、湿地生態学の研究者、世界の信仰的リーダーとともに保全に取り組む人々、世界遺産条約のアドバイザーなどからの専門的知識や、湿地と結びついた文化遺産の多面的な性質についての本質的な証言を求めた。

世界湿地の日を祝って、ご自分の湿地にある文化遺産に近づいてみよう。その結果を条約事務局まで知らせてください。そうすれば将来の情報集に盛り込むことができます。

私達がいま湿地を利用する方法が将来にはその文化遺産になるということを考えよう。あなたなら将来の世代にどんな遺産を残しますか？

条約事務局連絡先：

The Ramsar Bureau
Rue Mauverney 28
CH-1196 Gland
Switzerland
Tel.: +41 22 999 0170
Fax: +41 22 999 0169
E-mail: ramsar@ramsar.org
Web site: <http://ramsar.org>



湿地と人々の歴史

湿地と人々との関係には、さまざまなものが数多くあり、それらはしばしばたいへん密接である。今日の重要湿地の多くは非常に古く、人類が太古に利用したことを明白に示すものもある。その一方、現在は乾燥してしまったところでも、かつては湿地であり、人類の過去の重大な形跡をまだかなり留めているところもある。アフリカ地溝帯に沿ってかつての湖岸湿地が人類の祖先の生息地を留めている。たとえば200万年以上前と考えられるオールドウパイ峡谷である。ヨルダン川流域では、イスラエル北部のゲシェル・ベノト・ヤアコフで、並外れた湿地環境の存続状況により同川渓谷における80万年前の人類の祖先の活動の形跡が残っていた。動物の骨や石器、多種の植物によって人々がこの渓谷の湿地へ狩猟や採集のためにやってきて、湿地植生から食物や原材料を得ていたことが示される。

温帯から北極近くまでの湿地はいっぽう、1万2千年の歴史しかなく、それは最後の氷

河期の氷河が融けはじめて海面上昇はじめてからのことである。これらのほかに、ずっと最近になって形成された湿地や、人類の活動によって形成されたものさえある。考古学的形跡や文書的証言から、イングランド東部のノーフォーク州の湖沼地方は、500 - 700年前からの泥炭採取の結果できたものであることが知られ、また過去200年あまりのあいだに氾濫原で砂利採取されたあとに湖沼や沼沢地が形成された多くの場所が知られている。このような人間社会と水の密接な関係

は世界中で繰り返されている：チリのモンテベルデの溪流沿いの人々、イングランドのボックスグラブの泉のそば、オーストラリアのムンゴ湖岸のひとびとなど。それぞれ歴史は違えど、各々の大陸で最も古くから人類が活

湿地の文化遺産 2

(ラムサール条約 2001年)

和訳：琵琶湖ラムサール研究会 2005年

動していた形跡を代表するところである。

FLORIDA MUSEUM OF NATURAL HISTORY, CAT. NO. A5540



米国フロリダの湿地で発見された1000年前の木製の面。

「非常に古い湿地も、比較的後生のものも、それ自体の歴史の形跡を内包し、人々の活動の証言を留める。」

振り返れば、人々と湿地の関係にはさまざまなものが見出せる。欧州北西部の大高層湿原地帯ではたとえば、有史以前から中世にかけてつくられた木製道路によって人々が湿原のなかを横切って根気強く移動したことがわかる。ニュージーランドでは、欧州からの進出以前に、マオリの人々は「パ」と呼ぶ防御的集落を丘陵の上や湿地林の中に築いた。ニュージーランド北島にあるマンガカワレ湖周辺の湿地林にあるものは、木製の柵で強固に防御されており、人々はその背後で頑丈な木製家屋に暮らしていた。

時には人々が湿地を埋葬に適した地とみなしていたこともある。考古学的発掘によって、埋葬にまつわる儀式や慣習の形跡が見つかっている。米国フロリダ州ケープ・カナベラル近くのウィンドオーバーにある池が注目される。ここは8千年前に埋葬地として利用された。300名ほどが、植物繊維で編んだマットやブランケットに包まれて埋葬されており、骨や角ならびに植物からつくった埋

葬品が伴われていた。およそ最も興味深い形跡は、現在でも人類が悩まされている病気のひとつである脊椎破裂によって亡くなった子どもの骨格であろう。遊動性のウィンドオーバーの人々は、その子が15歳で亡くなるまで、病気のその子を連れて移動し、そして特別な世話を捧げたのであろう。

湿地はまた、日常の暮らしと異なる世界とのつながるところ、神々や精霊と交わることが可能なところ、あるいはまた実際どおり他の生物の住処と、認識されてきた。このような観点から捧げものをする場所となることもある。2千年近く前のドイツ北部からデンマークにかけて、ユトランド南部に細長く伸びるニュザム渓谷では、勇士たちが遠征を成功裏に終えてその戦利品を彼らの神に捧げた。槍や刀剣、描画された木製の盾などとともに、少なくとも3隻の大きなすばらしい舟が捧げられていた。

このような湿地と人々とのつながりについての膨大な情報はどのようにして証明されてきたのであろうか？ それは、考古学研究者の骨身を惜しまない作業に尽きる。数千年にも及ぶ湿地の発達を、湿地内部の遺物、すなわち岩盤から地表面までのあいだに横たわる粘土や沈泥ならびに泥炭を科学的に分析して追跡する努力が払われた。その湿地植生は花粉をはじめとする植物遺体の分析から明らかになり、軟体動物やカブトムシのような昆虫類の抜け殻から過去の湿地状況も明らかになる。湿地の水質の変化 - 塩分濃度やpH、水温などの変化さえもわかることが頻繁である。このような研究が多くの場合、その湿地周辺の地方の環境変化についての情報を提供し、ひいてはその地の文化の発達を時代を超えたよりよい理解を導く。

湿潤な温帯気候では、大きな半球形のミズゴケ泥炭を形成する高層湿原が発達する湿地が見られる。高層湿原における環境条件は特に、その時代の環境の形跡や考古学的有機

物を保存するのに好都合である。その考古学的有機物には、木製の構造物やたまには人々自身 - 骨格に加えて皮膚や髪の毛、衣服、そして最後に摂った食事の形跡さえ - 含まれる。



英国のもろい湿地遺跡で、紀元前3600年ごろに湿原を横切っていた道路の発掘作業を進める研究者たち。

非常に古い湿地も比較的後生のものも、このようにそれ自体の歴史の、そしてその湿地周辺域の状況の形跡を内包する。人類の活動、すなわち過去に人々が湿地に認めた文化的価値の重大な証言を留める可能性を有しているのである。人々の歴史のどの時点においてもさまざまな道筋で湿地は常に人々にとって欠くべからざる重要性を持っている。そしてそれゆえに、われわれ人類の文化の歴史において湿地は重要な構成要素となっているのである。湿地の機能や価値に対する現存の脅威を緩和できるように湿地を保全管理する取り組みにおいて、この代替不可能な湿地の文化遺産も保全できるような計画づくりを進める必要があるという理解がますます高まってきている。

条約事務局連絡先：

The Ramsar Bureau
Rue Mauverney 28
CH-1196 Gland
Switzerland
Tel.: +41 22 999 0170
Fax: +41 22 999 0169
E-mail: ramsar@ramsar.org
Web site: <http://ramsar.org>



太古より食物や原材料の供給源だった湿地

太古の昔より人々は広範な湿地の動植物にその生存を頼ってきた。食物、燃料、隠れ家の原材料、衣服、装飾品、その他の個人的財産など。スペインのトラルバ沼沢地からはゾウの骨が、ドイツのショニンゲンからは木製の長い槍が見つかり、前期旧石器時代からわれわれの遠い祖先がすでに湿地で狩猟していたという劇的な形跡を提供している。タンガニカ湖のカラムボ滝では、木や植物遺体が状態良く留められており、太古の人々が湿地から植物のたべものや他の資源も集めていたことが思い起こされる。

最後の氷河期が終わってすぐに、人々の湿地資源の利用が高まったことが日本の考古学的遺跡からわかる。ラムサール条約登録湿地のひとつ琵琶湖^{あわづ}にある粟津遺跡（大津市）は貝類を中心とする貝塚であるが、ヒシ類やコイ科魚類、ナマズ科魚類、亀類、カモ類などの形跡も出土し、これらの湿地生物が人々の食物の重要な部分をなしていたことが示される。

北米や欧州北部の遺跡でもおおよそ同じ時期に人々が漁業をしていたことが示される。北米大陸の北西部に位置するホコ川（米国ワシントン州）では3千年前の釣り針が近年の発掘により見つかった。釣り針は木製で曲げてつくったものとまっすぐな2本を縛り付けたもの³とがあり、考古学研究者と地元先住民のマカの長老たちが実際に試したと

ころ、曲げた釣り針はマダラ *Gadus macrocephalus* を、縛り付けた型の釣り針はカレイ目魚類を釣るのに適していることがわかった。ドイツのフリーザックでは網が用いられていたし、エストニアのクンダでは

カワカマス科魚類の骨格にやすやもりの骨でできた先端部がささったままのものがふたつ見つかった。ロシア北西連邦管区プスコフ州のウスビャティでは、ヒシ類や、コイ科、カワカマス科、ザンダー（スズキ目ペルカ科）、ブリームなどの魚類といった粟津遺跡を思い出すような形跡が出土した。



WWF-CANON/JOHN E. NEWBY

屋根を葺く材料となる葦の運搬。マダガスカル。

古代より湿地の鳥類は人々の食物として狩猟されてきた。網や弓矢、訓練した猫や猛禽類など多くの種類の技術がそのために用いられてきた。エスナの寺院の浅浮き彫りには、古代エジプト第5王朝の時代から手の込んだ狩猟方法が描かれている。すなわち、ガチョウを飼いならして罠りに用いたり、粘土と羽毛でこしらえたデコイを用いたりして、ハンターが隠れた場所に渡り鳥をおびき寄せる方法である。ずっと近年になると、レクリエーションとしての狩猟が特に先進国でポピュラーになり、その結果、狩猟を持続可能なものにし、また湿地生態系を維持する必要性についての懸念を導いている。これまでもしばしば狩猟者団体が、野生の鳥類個体群と彼らが生息する湿地環境を維持しようとする活動への援助を実施している。

湿地はまた太古から農耕に用いられてきた。特に熱帯から亜熱帯地域で、持続可能な農耕であったことが、常にとはいえないが、

「人類の歴史の始まりから、暮らしを支えるために人々は湿地に向かってきた。」

湿地の文化遺産 3

（ラムサール条約 2001年）

和訳：琵琶湖ラムサール研究会 2005年

もちろんしばしばである。中米のベリーズからグアテマラにかけて、マヤの人々はおよそ3千年前に湿地土壌を排水して耕作していた。パプアニューギニアでは、ハイランド地方のワーギ川沿いの調査研究によってさらに古い形跡が見つかった。それは、9千年前に種々の作物を育てるために溝や堤を構築した庭園大の耕作システムで、このシステムはのちの約2千年前に湿地性のタロイモ生産に集約されるように改良されていた。日本では少なくとも2500年前に野生の食物資源に加えて湿地での耕作による食物を利用していた。すなわち沼沢地に溝を掘り、木を用いて堰や堤を築いて水田を開いた。中世の欧州では、草食家畜を放牧したり牧草生産のために湿地から部分的に排水したところがたくさん見られ、そのうち塩生湿地では排水によって肝臓に寄生する吸虫類に羊が侵されずに放牧できるようになった。

JOHN COLES



2千年前の水田システムの一部をなす木製の水門と堰の発掘。大阪。

そのほか湿地から得られる原材料として粘土や泥炭がある。これらは湿潤条件および浸水条件下で蓄積される。チェコ共和国のドルニ・ベストニツェで、2万5千年から3万年前に焼かれた小さな粘土製人形が見ついている。欧州で泥炭を掘り出して乾かし燃

料として用いたのは3千年前からであり、イングランド東部の低層湿原では、例えば泥炭や塩水に浸した葦や藨草を燃やして製塩が行なわれた。塩自体ももうひとつの湿地資源である。

湿地植物の多くも価値のある資源である。特に淡水湿地の葦や藨草のなかまの多くの種は世界中で利用されてきた長い歴史を持つ。現代までつづく舟や筏の材料として、例えばチグリス - ユーフラテス湿地ではヨシ属が、南米アンデスではトトラ[カヤツリグサ科]が、そしてアフリカではパピルス[カヤツリグサ科]が利用されてきた。

湿地の動物も人々の食物となるだけでなく原材料も提供してきた。欧州や北米のビーバーはたとえば、食物としてだけでなく、毛皮や、臭腺から分泌されるアスピリンに似た鎮痙剤カストリウム(海狸香)、鑿の刃にその鋭い切歯を得ようと狩猟されてきた。湿地の動物が慣習に用いる材料を提供することもある。たとえば、コペンハーゲン近くの海のかつての入り江に位置するベズベクで見つかった約6千年前の埋葬地で、母親の脇に吊われた赤子の下にハクチョウの翼が敷かれていた。

世界中でそして人類の歴史が始まって以来、暮らしを支えるために人々は湿地に向かってきた。このような湿地への依存が今日でも続いているということを忘れないようにすることが大切である。十億の人々が現在その主要なタンパク源として魚類に依存している。その大多数は海洋性魚類であるが、それらの3分の2のものはその生活環の一部で沿岸域湿地に依存している。また世界中で三十億の人々が湿地の作物である米を主食としている。

条約事務局連絡先：

The Ramsar Bureau
Rue Mauverney 28
CH-1196 Gland
Switzerland
Tel.: +41 22 999 0170
Fax: +41 22 999 0169
E-mail: ramsar@ramsar.org
Web site: <http://ramsar.org>



湿地で働く - 仕事の手段

湿地は人々が挑戦すべき環境を提供する。そこで暮らし、働くにはしばしば物理的な困難を伴う。マラリアや住血吸虫病といった頻りに湿地と結びつく病気ももうひとつの困難な側面である。しかしそれらとひきかえに豊富な水や多様な天然資源を食物、繊維、医薬、隠れ家として湿地は提供する。そして通常その生産性は高水準であり、従って人類が存続するために欠かせない取り合わせである。

湿地の天然資源を利用することが、数千年にわたって人々にその創造的な才能を呼び起こしてきた。特別な道具や家、漁労や狩猟、製塩、農耕、林業のための移手段などを発達させる必要があった。こうして、豊かで多様な文化遺産が、道や仕事の道具、家屋や船など、育まれてきた。

湿地環境の舟に共通の特徴は浅い^{きっすい}喫水と

丸い船尾である。米国フロリダ州のニューマン湖で見された有史以前のカーヌーがひとつの良い例である。ここに先住していたセミノールの人々はこの湖をピストラチョッコと呼び、これは「広い舟の場所」という意味である。東南アジアの運河や三角州、河川では、^{サンバン}三板やはしけなどたいへん多様な舟が見られる。これらの舟は住まいにも店にもなり、もちろん漁業や運搬といった伝統的な用途にも用いら

れる。これらの舟が特に印象的なのは香港やタイであろう。アンデス地方の湖では、トトラ[カヤツリグサ科]を用いて舟が作られる。それは「caballitos de totora」(トトラの小馬)

とスペイン語で呼ばれる。トトラはまた、籠やマットのように日常の生活用品に編まれる。浅い沿岸域でも同様に多様な工芸が見られるのはもちろんのことである。その地の水域の状況や得られる原材料によって多様であり、それらの工芸は数百年ものあいだ利用され、熟練工がその技能を代々引き継いできた。

ROGER LEGUEN / RAMSAR



ベネズエラのラムサール湿地ロケス国立公園における伝統的な漁法。

漁業は湿地における第一の活動であり、効力のある船のデザインだけでなく計りしれない種類の捕獲道具と関連する。網やわなが主要なものであり、刺し網から地引き網、投網、湖沼や河川、河口部での常置の定置網や小型で移動できるわなまでさまざまある。これらの場合もまた、水域の条件や得られる原材料、また対象魚種が、それらのデザインや構造に反映される。

水域で暮らすためには加えて、建築材やデザインに工夫が必要である。ベネズエラのオリノコ川デルタでは、ワラオの人々が湿地の植物を家の建築に用いる。彼らの名称「ワラオ」は沼沢地に住む人々という意味である。水域で暮らすための適応として家を高床式に建てるのが世界の多くの地域で発達した。ミャンマーのインレ湖では竹を用い、東

「湿地の天然資源を利用することが、数千年にわたって人々にその創造的な才能を呼び起こしてきた。」

南アジアの小さな島々や沿岸の入り江ではコブダネヤシ（ニボンヤシ） *Oncosperma* またはマングローブが用いられ、アマゾンの冠水森林では材木で家を建ててヤシで屋根を葺く。アマゾンには雨期に水位が最大10 - 12mも上昇するところがある。そこの人々はそれに適応できる浮き家を築く。水域で暮らすためのさらなる適応として水に浮かぶ菜園も人々はつくりあげた。古くは14世紀にメキシコの遊牧民であるアステカの人々がテスココ湖で水上菜園を営んだ記録がある。現在でもカシミールのダル湖やミャンマーのインレ湖など営まれているところがある。



バンコクやアムステルダム、カラカスの一部、そしてこの写真のベニスといった主要な都市のいくつもが湿地の上に築かれている。

湿地に関連した恒久的な構造物も重要な文化遺産である。バンコクやベニス、アムステルダム、カラカスの一部といった湿地の上に築かれた主要な都市。これらの湿地の都市景観には、運河が寺院や宮殿、家屋とともに融けこんでいる。塩の利用が港湾や棧橋、貯蔵庫の建設を導いてきた。地中海の沿岸域沼沢地の多くで、古くはローマ時代から中世の

ころから、また水資源の利用自体、そのための効率的な対話の必要性とともに、広範な水関連の構造物を築き上げてきた。ナイル、チグリス、ユーフラテス、黄河などの大河で、各文明は最も効率的に水を利用しようとしてダムや水路、運河のシステムを築いた。世界の他の多くの地域でもこのようなシステムが見られるが、湿地環境を損なうこともある。

20世紀後半にダム建設の極端な時期があったことにより、近年ダムに関心が当てられている。1950年から1980年までの30年間に世界中で3万5千を下らない数のダムが建設された。世界ダム委員会の報告書は、4千万から8千万の人々がダムのために立ち退かされ、数えられない人々がそれ以外のさまざまな影響を受けたと推定している。不釣合に先住の人々がダムによる負の影響を被り、しばしば彼らの生命や生活、文化や精神的存在に対する容易ならない影響を受けてきた。文化遺産に対する負の影響がダムの計画過程において無視されていることがいまもって大部分であり、現在でもアフリカ、アジア、新熱帯区のいくつもの国で地元の人々の生活スタイルや伝統を破壊しかねないダムの建設計画に対する議論が続いている。

人々が湿地環境に暮らし働くことによって、伝統や生産物の驚くべき多様な遺産が生み出されてきた。今日の経済発展速度はこれら文化遺産への不断の脅威となっている。いま挑戦すべきは、これら遺産を失わないような管理戦略を開発することである。

条約事務局連絡先：

The Ramsar Bureau
Rue Mauverney 28
CH-1196 Gland
Switzerland
Tel.: +41 22 999 0170
Fax: +41 22 999 0169
E-mail: ramsar@ramsar.org
Web site: <http://ramsar.org>



文化遺産 - その管理への挑戦

湿地の豊かな文化遺産は、その湿地内や周辺に住む人々によるしっかりした管理がなくては創造もされずまた維持されることはない。その管理の方法や慣習そのものが、彼らによって生み出された構造物や景観と同様に文化遺産の一部をなす。それらによって今日まで生き残ってきたすばらしい湿地が世界中にある。地元社会やその国が高度な経済的見返りの要求に直面するなかで湿地における持続可能な利用を維持しようと努力するに従って、この遺産の重要性はますます高く認識されるようになってきている。

今日まで継続して用いることに成功した古来の伝統的な管理の慣習がいくつもある。オーストラリアが世界遺産条約とラムサール

条約に登録しているカカドゥ国立公園では、アボリジニ社会が数千年にもわたって伝統的管理を実施してきた。ここでは彼らにとって決定的な湿地の文化的、精神的、社会的役割を現在でも果たしている。同様に、メキシコのタバスコ州にあるラムサール湿地セントラ沼沢地では、マヤの人々がこの広大な湿地の資源を西暦600年ころからずっと調和的に利用してきた。アルジェリアではまた7世紀以来ずっと、人工的地下水路であるフォガラ（カナート）

を維持するための複合的な管理協力システムによってオアシスへの水供給が保証されてきた。

論争を扱う興味深い伝統的管理慣習は合意法廷である。中世にスペインのバレンシア地方でかんがいを行なう地元の社会が単純だが効力のあるシステムをつくり、水争議をすばやく口述手続きにかけて高水準の社会的コンセンサスを得て解決するようにした。それは「水法廷 *Tribunales de las Aguas*」として知られ、1千年以上も施行されており、

欧州で現在まで運用されている最も古い司法制度と思われる。法廷会合は毎週1回、大聖堂の玄関で開かれて公正を果たしている。



A. CAMOYAN

スペインのラムサール湿地ドニャーナ国立公園の塩生湿地をゆく漁師。

比較的变化せずに維持されているこのような管理慣習の例は多くあるものの、人口の増加や都市化の進行ならびに経済機構の展開の脅威を受けている伝統的慣習も多く見られる。今日の課題は、伝統的知識を活用しつつ文化的伝統を維持しつつ現在の需要にこのような慣習を適合させてゆくことである。革新的な管理戦略を地元の利害関係者と中央の行政府とのあいだのオープンな対話から発展させることが多くの場合に成功の鍵であることが証明されている。このことの重要性は1999年にラムサール条約締約国会議が採択した地元社会の参加指針に強調されている。

マリのニジェール川内陸デルタでは、牧畜民と農耕民ならびに漁民が発達させた管理システムを何世代にもわたって維持してきた。そのシステムは、一年の異なる時期にそれぞれのグループが氾濫原の資源を持続的に利用することを許すものである。最近数十年はしかし、人口の増加と厳しい旱魃が中央集権化に伴い、伝統的な慣習を変えなくてはならないようになってきた。その結果は貧困や争議、生態系の悪化を招いている。そこで、国際機関が地元民と国の政府の代表の協力関係づくりを支援して、地元社会の管理慣習を改良することをその解決策とした。このような地元社会主導の変化によって、この氾濫原における人々の伝統的ライフスタイルや文化の伝統の大半を維持できるようにする

「比較的变化せずに維持されている湿地管理慣習の例は多くあるが、脅威を受けている伝統的慣習も多い。」

ことができる。

地元の漁業者が魅惑的な伝統的管理システムを発展させて何世代も受け継いでいる例もしばしば見られる。ニュージーランドのマオリの人々にとって沿岸海域は彼らの漁場として陸上と同等の重要性をもつ。そこでかれらは高度に体系的な慣習をかれらの真理「tikanga」に基づいて発展させた。それは、海産物を集めたりやりとりする際には、その生き物の生態を詳しく理解することによって得られる精神的規範とその保全のための厳しい漁業規則に基づいて行なうということである。外の世界とつながってしまった今日では彼らがこれを維持することは、海産資源を利用しようとする他のユーザーからの要求と競合するなど、なかなか困難である。彼らの伝統的手法をいくつかの沿岸域で維持するために、ニュージーランド政府はマオリの人々に、彼らだけが非商業的な目的範囲内で海産物（魚類、貝類、海藻類）を収穫することができ、そして彼らの慣習とライフスタイルの実行可能性を保つことができるように維持管理してゆく権利を付与する特定の沿岸域を設定している。

セネガルのシネ・サルム川河口部では地元民が完全に統制する伝統的な漁業が人々の収入と食料の源として何世代も人々を養ってきた。セネガルの独立ののちより現代的な中央集権的な管理方法に道を譲り、その結果、沿岸域生態系の劣化に部分的に結びつき、小規模漁民と大規模漁民とのあいだの争議が起こり、最終的に伝統的ライフスタイルが崩壊してしまった。そこで、地元漁民、加工業者、卸売業者、地元の信仰と宗教の権威者を、研究者や政府の代表者とともに集めて、新たな管理計画づくりが進められた。その計画は、伝統的慣習を現代的な管理規則（新たな法制度を含む）と調和させるいっぽう、地元民に

自分たちの漁業管理を自分たちで統制し完全な責任を持つことが盛り込まれている。この新たな戦略の重要な結果のひとつとして、魚の加工の役割を伝統的に引き受けてきた女性たちがこの意思決定プロセスに平等な立場で参加したことが挙げられる。女性が伝統的な漁業管理において本質的な役割を担ってきた同様の例は、エクアドルのグアヤキルや、コロンビアのカリブ海沿岸ならびに太平洋沿岸でも見られる。



A. BOUMZEBUR

アルジェリアで7世紀以来ずっとフォガラを維持するための複合的な管理協力システムによってオアシスへの水供給が保証されてきた。

多くの場合、悲しい現実として、生態系が取り返しのつかない統制不能な変化を受けてしまった場合にもはや伝統的慣習は維持されえない。ネパールのラムサル湿地コシ・タプがこの例である。ここでは無統制の漁獲が資源を枯渇させてしまい、伝統的な漁民が生計を失なった。またその湿地生態系の生態学的特徴も害されてしまった。ラムサル条約小規模助成基金の支援で、漁民たちは養殖漁業の技術を学び、収入を得るための別の方法を獲得した。この場合、解決策はもはや伝統的技能的維持には役立たなかったが、事実上今日の新たな技能を発展させている。時間が経った将来に、伝統的な技能と文化遺産になることだろう。

条約事務局連絡先：

The Ramsar Bureau
Rue Mauverney 28
CH-1196 Gland
Switzerland
Tel.: +41 22 999 0170
Fax: +41 22 999 0169
E-mail: ramsar@ramsar.org
Web site: <http://ramsar.org>



湿地 - 文化的景観

有史以前から、人々は何百世代にもわたって湿地やその周辺に暮らしてきた。自然の要素と人工の要素を独得に結びつけることによってその湿地を文化的景観に変容させることもしばしばであった。このような文化的景観は人類がそこに暮らした生きる記録であり、評価できないほどの文化歴史遺産を代表する。

水稲栽培は、例えば、世界の多くの地域で特徴的な景観をつくり上げた。6千年前の中国に源を発したのちアジア全域に広がり、人類が湿地を大規模に改変し始める先駆けとなった。水田はいまやアジア以外でも多く見られるが、生産性がたいへん高い農業生態系

であり、アジア地域では人々の社会の発展の基礎として貢献してきた。数千年にわたって水稲栽培を続けてきたインドネシアのジャワ島ピノングでは、この穀物生産と養殖漁業を組み合わせ「*manipadi*」として知られる湿地の統合的利用法が生み出された。これによって、動物タンパクも炭水化物と同時に得られるという特殊な湿地環境を作り上げた。フィリピンのコルディリエーラの棚田群は険しい山肌の天然の等高線に沿って開かれたもので、生きる文化遺産のもうひとつの優れた例である。人々は

世代を超えて2千年以上もこの棚田を維持し、1995年に世界遺産に登録されるほど美しい文化的景観をつくりあげている。地中海

地域でもようやく数世紀にわたって水稲が栽培されてきた。その地域では人々の基礎食物の多くの部分を占めるようになり、米食文化も育まれている。



C. J. HAILS & A. J. HAILS

マレーシア半島部のブラウ・セムピラン沖に設置された伝統的な定置網。東南アジアの浅い沿岸水域に共通の光景。

「湿地の景観は実際のところ文化的景観であることがしばしばで、それらは数千年を超える人類と湿地の密接な関係を反映するものである。」

沿岸域湿地は、いくつかの内陸湿地とともに、数千年にわたって人類に塩を供給してきた。その製塩技術もそれぞれの湿地の条件にあわせて多様に発達した。料理に、野菜などの漬け汁として、また種々のミネラル分を得るために欠かせない重要性のために、塩は湿地社会にとってその歴史を通じて経済的に重要性であった。ボリビアのウユニの塩生湿地やチリのアタカマ砂漠が、世代を超えた採塩活動によって形成された文化的景観の傑出したものである。沿岸地域でも内陸でも塩分の高い水を蒸発させることによって抽出されるが、その過程には次の4つの基本要素が反映される：塩分を含む水；壁やダムを築くための土壌；蒸発に役立ち水を吸い上げる風車を回す空気；太陽の熱。メキシコのゲレーロ州のペタトラン塩性干潟、フランスのラムサール湿地グランデ塩田、その他の地中海周辺にある数多くの塩分を含む泉など、こ

の4つの条件を備えていることがよくわかる。そしてこれらの多くは、古代ローマ人がはじめて利用した。

河口域では上流からの淡水と海水が混じりあい、さまざまな生き物の繁殖と成長を支える高い栄養水準を形成する。エビ目などの甲殻類や貝類、魚類などがその恩恵を受ける。近年は沿岸での水産養殖に役立っているが、それが常に持続可能とは限らない。漁民や海産物を採集する人々がつくり上げた定置網や足場などを伴う湿地景観の例が世界の多くの地域に見られる。スペインのガリシア州のリアス海岸から、エジプトのサルム河口、セネガルのサルム川デルタ、フィリピンのマニラ湾まで、これらの人工構造物が独得の文化的景観を形づくっている。

世界の乾燥地域でも同様に、水を利用する必要性から人類は古来の水管理慣習を通じて魅惑的な文化的景観をしばしば作りあげた。アルジェリアのラムサール湿地ウレド・サイド・オアシスでは、伝統的な人工的地下用水路であるフォガラ(カナート)がオアシス住民の社会によって維持されている。この創意工夫に富む方法は、複雑な小さい水路で地下水源をつなぎ配水するものであり、伝統的な社会体系の下にオアシスでナツメヤシや穀物、野菜を耕作する人々に水を供給している。フォガラは現在でもイランやイラクならびにモロッコで、アルジェリアと同様に用いられており、ペルシャに源を發し7世紀にアラブ人が北アフリカ北西部(マグリブ地域)に入ってきた際に導入されたものと考

えられている。



UNESCO

2千年以上もフィリピンのイフガオの人々が維持してきたコルディリエラの棚田群は、険しい山肌の等高線に沿って開かれており、たいへん美しい文化的景観をつくりあげている。

湿地の景観は実際のところ文化的景観であることがしばしばで、それらは数千年を超える人類と湿地の密接な関係を反映するものである。共通してこれらの景観は、そこに暮らす人々にもそうでない人々にも、その無形財産的な重要性を伝え、国民全体の文化遺産の重要な構成要素となる。これらの遺産の重要性の認知の高まりは、国内的、地域的、国際的にも、さまざまな取り組みに反映されている。例えば多くの国が文化的景観を保全するための戦略や規則を策定する際、2000年7月に欧州会議による欧州景観条約(フィレンツェ条約)の採択、世界遺産条約における文化的景観に対する認識を高める近年の発展(参照:シート7.世界遺産条約と文化的景観、そして湿地)などが挙げられる。



条約事務局連絡先:

The Ramsar Bureau
Rue Mauverney 28
CH-1196 Gland
Switzerland
Tel.: +41 22 999 0170
Fax: +41 22 999 0169
E-mail: ramsar@ramsar.org
Web site: <http://ramsar.org>

世界遺産条約と文化的景観， そして湿地

世界遺産条約は、その傑出した自然の価値あるいは文化的価値を全人類のために保存されるべき区域や物件の一覧表を作成することによって世界の遺産を規定し保全する。そして締約国の密接な協力を通じてそれらの保護を確保するように努力する条約である。多数のラムサール条約登録湿地が世界遺産条約にも記載されており、これらふたつの条約のあいだで1999年に署名された覚書が共通目標を達成するための将来の協力の枠組みを提供する。

当初世界遺産条約は自然の価値か文化的価値かどちらかを有する区域や物件を認め

ていたが、1992年に保護に値するもうひとつの範疇^{はんちゆう}として文化的景観の認定を奨励するという重要な一歩を踏み出し、このような範囲を認めて保護するはじめての国際法的文書となった。こうして、文化的景観が同条約第1条に規定する「自然と結合した人工の所産」に相当することを認めるに至った。文化的景観は、人類社会とその居留地が自然環境が及ぼす物質的制約と機会に影響されつつ時代とともに発展してきたことを証明する。

「文化的景観」という用語は、人々と自然環境の多様な相互作用の証しを含む。それらはしばしば、持続可能な土地利用の技術や自然との精神的関係を反映

する。2001年8月までに全部で23の文化的景観が世界遺産一覧表に記載されており、まだ控えめだが数年のうちにはずっと増加することであろう。すでに文化的景観の5つの記載地はラムサール条約の登録湿地であり、他のラムサール湿地も世界遺産条約の文化的景観として認められる大きな機会が、ふたつの条約の協力関係を通じて提供される。



T. JONES/RAMSAR

ハンガリーのラムサール湿地ホルトバージ国立公園は世界遺産条約の「有機的に進化する景観」の傑出した例である。

「世界遺産条約は1992年に保護に値するもうひとつの範疇として文化的景観の認定を奨励するという重要な一歩を踏み出した。」

世界遺産条約が規定する 文化的景観の3つの範疇

「明瞭に意匠された景観」が最も確認しやすいもので、人間の設計意図の下に創造された景観。これには、庭園や公園用地の景観で、常というわけではないが多くの場合に、宗教的あるいはその他の記念建造物やその一群に関連する美的な理由で構築されたものが含まれる。

ポルトガルの「シントラの文化的景観」がその典型例。

「有機的に進化する景観」は、はじめは社会、

経済、統治者、あるいは宗教による命令や要請により築かれ、その後その自然環境との関連や反応によって現在の形態に発達してきた景観。このような景観は、その形態の進化の過程やその構成要素の特色に反映されて、次のふたつに区分される：

a) 「**残存景観 (または化石景観)**」。過去のある時点でその進化過程が完了してしまったが、有意に区別される特徴がその物理的形態にまだ見られるもの。

ハンガリーのラムサール湿地のひとつ、ホルトバージ国立公園が傑出した例である。ここでは、2千年以上にわたりその区域を伝統的に利用してきた牧畜社会が形づくった文化的景観をまだ見ることができる。

b) 「**継続する景観**」。これは現在の社会がその伝統的生活様式と密接に関連する社会的役割の活性を保ち、その景観の進化過程が引きつづき進行しているもの。同時にその時代を越えた進化を顕著にあらわす物理的形跡を展示するもの。

欧州にはラムサール条約に登録される湿地も含んで、次の3つの例がある：スウェーデンの「エーランド島南部の農業景観」、フランスの「シュリー・シュル・ロワールとシャロンヌ間のロワール渓谷」、ならび

にリトアニアとロシア国境の「クルシュー砂州」。

「**関連する景観**」は、物理的な文化形跡がわずかであるか欠いており、それよりもむしろ、宗教的、芸術的、あるいは文化的に強力なその自然の要素との関連が存在する景観。

オーストラリアの「ウルル＝カタ・ジュター国立公園 (エアーズロック)」が好例で、先住民にとっての根源的重要性をもつ。

人々の環境に対する精神的、物理的、ならびに技術的反応の相互作用に特徴づけられて、文化的景観は自然と文化が切り離せないことを証明する。このような信仰や伝統、遺跡や自然の混合を保存することは、その管理者にとってかなりの困難を提示する。これらの困難に管理者が対処するのを助けるために、ユネスコ世界遺産センターと条約の国際的諮問機関3団体が「文化的景観の管理指針」を策定中である(訳注：2005年9月時点で未刊)。この指針が、人々と自然とのあいだの慎重な扱いを要するバランスを保護する日常的な管理者の活動を援助することが期待される。そして文化的景観でもあるラムサール条約登録湿地の保全管理に役立つツールになることであろう。

「世界遺産条約」は正式には「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」として、1972年にユネスコによって採択された。2001年7月現在で、世界の164の国々が署名している。ウェブサイト <http://www.unesco.org/whc/>。

条約の国際的諮問機関3団体は次のとおり：

IUCN - 国際自然保護連合。自然遺産に関して助言する (<http://iucn.org/themes/wcpa/wheritage/wheritageindex.htm>)。

国際記念物遺跡会議。文化遺産に関して助言する (<http://www.icomos.org>)。

文化財保存修復研究国際センター。文化遺産に関して助言する (<http://www.iccom.org>)。



条約事務局連絡先：

The Ramsar Bureau
Rue Mauverney 28
CH-1196 Gland
Switzerland
Tel.: +41 22 999 0170
Fax: +41 22 999 0169
E-mail: ramsar@ramsar.org
Web site: <http://ramsar.org>

湿地の文化遺産 7

(ラムサール条約 2001年)

和訳：琵琶湖ラムサール研究会 2005年

湿地 - 学習と余暇のための 文化的景観

古代より湿地はレクリエーションや余暇の場として好まれてきた。豊かで独特な動物相は、とりわけ鳥類が、狩猟に興じる君主や貴族、僧侶たちを引きつけた。エジプトの古代都市テーベの墓地遺跡には、網を用いて鳥類を捕獲したり、水鳥を狩猟する場面の絵がある。ナイル川の三角州や湿地は、木製のブーメランや訓練した猫を使って鳥類を狩猟する高貴なエジプト人を引きつけたことで知られる。

12世紀スペイン中部にあったカスティーリャ王国の王子ドン・ファン・マヌエルは、その著書「狩猟の本 *Libro de la Caza*」で、現在のバレンシア州内にあるビエーナ潟湖とエルチェのアルプフェーラ潟湖を豊かな狩猟地として称賛している。エステ家は16

世紀にイタリアのポー川デルタに狩猟時の宿泊施設としてメゾラ城を建てた。この豪華な建物は現在、旅行者を引きつけるポー川デルタ州立公園ビジターセンター（エミリア＝ロマーニャ州）になっている。インドのケオラデオ国立公園はもともと狩猟目的の保護区として150年前に当時のパラトプール藩王国のマハーラージャが開いたもので、現在では国立公園ならびにラムサール条約登録湿地となり、旅行者のための施設も良く整備されている。

もちろん過去においては、このような余暇活動は社会の中でも裕福な人々だけが

可能であり普通の人々はこのような道楽に費やす時間もお金もなかった。今日でも人々の大半がこのような余裕はないという国もあるが、前世紀のあいだに裕福な人々が費やす時間は劇的に増加した。そして今日、旅行者の数は、彼らの需要と希望を満たすことが地球規模の産業にまで成長している。湿地環境はこのような状況の下に、多彩な旅行者に

湿地の文化遺産 8

(ラムサール条約 2001年)

和訳：琵琶湖ラムサール研究会 2005年

レクリエーションの機会を大いに提供している。実際、多くの湿地でいまや、多数の人々が野鳥観察やハイキング、釣りやボートなどのより伝統的な滞在活動を楽しむようになり、地元レベルでも国レベルでも意味のある額の収入を提供するようになった。とはいえ、旅行者による湿地への人為的圧力が高まってしまっていることもある。いずれにしても、その湿地がもつ豊かな文化遺産を上手に活用してより関心の高い旅行者をより引きつけるレクリエーションを開発することによって、地元への貢献を高めるに十分な機会が生まれるようになっているのである。

WWF HONG KONG/LEW YOUNG



香港のラムサール湿地マイポ湿地自然保護区には、海老の養殖池が維持されている部分がある。「基圍 *gei wai*」と呼ばれアジアの沿岸域で数百年の歴史のある管理技術が実施されている。

その水や泥が備える治療特性という長所が旅行者の引きつける湿地もある。ヨルダンとイスラエルの境にある死海は世界中の海の中で8倍ものミネラルに富み、聖書の時代からその薬効特性によって高名である。薬効のある泥は、伝統的に漢方で用いられ、西洋医学の祖のひとりでもあるギリシャ医師ヒポクラテスも推奨し、保養地の基礎的な資源となっている。例として、グアテマラのイスパコ湖や、スペインのムルシア州にあるマール・メノール（小さな海^{メノール}の意の潟湖）が拳

げられる。

旅行者に対して解説を提供することが持続可能な開発を促進するためにたいへん効力を持つことがわかってきた。民俗誌博物館や湿地博物館、エコミュージアムなどの解説施設が、湿地の豊かな文化的伝統についての知識を訪問者に提供することを可能にし、同時に地元住民にとってのその湿地の文化遺産的価値を高める。

そのような例として、欧州の多くの場所で現在も伝統的方法で利用されている塩田がある。1千年前からほぼ同じやりかたを維持することによって、地中海地域の多くの国でこの文化遺産を保存しようとする関心がますます高まってきている。それは、単にその地の文化遺産を保存するだけでなく、旅行者に対する『生きる博物館』としてその湿地が発展する機会、すなわち伝統的な活動への意識を高めることや、より需要がある追加収入の機会をも提供する。湿地博物館として活用されている塩田はすでにフランス、ギリシャ、イタリア、スロベニア、スペインなど各国に広がる。例外的な一例は、スペインのアンチャーナ塩泉で、ここは120haの丘陵斜面を開いて木製の製塩テラスが12世紀につくられた。現在は国の記念物として多くの訪問者をひきつけている。

香港のマイポ湿地自然保護区はラムサール条約の登録湿地でもあり、その一部に海老の養殖池が維持されている部分がある。「基圍 *gei wai*」と呼ばれアジアの沿岸域で数百年の歴史のある管理技術が実施されている。それは文化的伝統を維持しているだけでなく、その養殖池と結びついたたいへん多様な野生生物もまた支えている。

考古学研究者は世界中で発掘調査を通じて人類の活動の過去の歴史を記録してきた。訪問者のためにポートや道、家屋、居住状況など創造的な再現を展示する野外の湿地博物館も数は少ないがある。例えば、イングランド、フランス、ギリシャ、日本、スコットランド、スイス、米国。訪問者が再現された

家屋に寝転がったりカヌーを漕いだり、祖先たちの暮らしを疑似体験できるセンターもある。イタリアのポー川デルタ近くのコマッキオでは、訪問者はその文化遺産に沿ったトレイルを散策し、もとあった海岸線の明確な形跡や人類の活動の考古学的遺物、実際に発掘された完全な古代ローマ時代の舟を見まわることができる。



ブルガリアの黒海沿岸の街ボモリエの塩田。この重要な保養地では、塩田博物館を設立し若い世代に製塩技術を訓練して、この伝統的な活動と湿地の維持を可能にしようとする計画をたてている。

湿地は多くの場合に壊れやすい生態系であることを認めなければならない。無計画にレクリエーション活動や旅行者の利用を増やしてしまうことは利益よりも損害を被る可能性がある。その湿地がレクリエーション活動をどれだけ受け入れることができるか（環境収容力）を理解しなければならない。スペインのバレンシア大学地中海湿地研究本部（SEHUMED）では特に、湿地の「物理的収容力」、「実収容力」、「許容収容力」を測定するための方法論の研究を進めている。とはいえ、湿地は自然の構成要素と文化の構成要素のあいだに独得の満足な調和を提供する。すなわち、注意深く利用すれば、これらすぐれた湿地についての私たちの知識や大切さの認識を高めると同時にその文化遺産を地元住民にも訪問者にも同様に恩恵となるように維持することができるのである。

条約事務局連絡先：

The Ramsar Bureau
Rue Mauverney 28
CH-1196 Gland
Switzerland
Tel.: +41 22 999 0170
Fax: +41 22 999 0169
E-mail: ramsar@ramsar.org
Web site: <http://ramsar.org>



湿地と精神生活

水は人々の生活に欠かせない。従って、古来より人々の信仰体系はどれも共通して水や湿地を神聖なものとして見なしていた。このことは降雨の多い地域でも乾燥地域でも同様であった。人々と湿地のあいだの神聖な関係は、いまではすたれてしまった文化もあるが、今日もまだ世界の多くの地域にある。

考古学によって古代の湿地信仰の形跡が広範に提供される。米国フロリダ州の8千年前の埋葬地や、2500年以上も前から巡礼の旅が盛んであったことを示すチチカカ湖周辺で見つかった数多くの遺跡がまず例として挙げられる。英国においては、現在のダービー州のバクストンの街の古代ローマ時代の名称は「Aqua Arnemetiae」で、これは神聖な水と木立という意味の古いケルト語を思い出させる。この名称は約2500年前のもので、このような泉と林と神聖さの結びつきは、ブリティン島に広まったキリスト教のように、誇張なく数千の神聖な泉や井戸、溪流や島で保持されてきた。

同様な関係は、干ばつが普通にあり生活を脅かすこともしばしばある、インドにも見られる。ヒンドゥーの人々が伝統的に降雨を得ようとする願いは聖なる湖や周囲の木立の信仰に焦点があてられた。インド北部にありクリシュナの聖地であるヴリンダーヴァンの林では、村々はすべて自分たちの神聖な小さな湖「クン

ド kund」を保持した。クンドの周囲に植えられた木立が雨水の保持を助け、その木立のなかほどに寺院が建てられた。その寺院はク

リシュナにまつわる神あるいは女神ラーダを祭った。クンドと木立は神聖不可侵であり、法的にもその寺院の神の所有とされた。こうしてクンドは維持され、雨水を蓄え、洪水を軽減し、灌漑用水を提供し、村の井戸水を供給する地下水を涵養し、また野生生物を支えた。近代になって、かつて神聖であったこれらの湖を軽視し汚染することによって、水不足や洪水、清潔な水の欠如といった問題を増加させている。いくつかのところではようやく、これらの聖なる場所の機能に対する配慮を高めようとする努力が払われている。



SEHUMED



ROBYN BEECHE, CIRCA PHOTO LIBRARY

- (上) スペインのパレンシア潟湖での毎年恒例の宗教儀式。病魔を追い払い、水を祝福する。
- (下) インドのクリシュナ神の生地であるヴリンダーヴァンの聖なるヤムナ川の濁った水で沐浴する親子。

アラビア半島では、湿地や泉は11世紀からイスラムの法的保護を受けている。「ヒマス himas」と呼ばれ、重要な水域や泉あるいは沼沢地の周辺に最大1 kmまでの範囲にこの保護区が設定される。イスラム法では、全て

「人々と湿地の精神的な結びつきは長い歴史を持ち、こんにちでもたいへん重要である。」

の生き物は新鮮な水を必要としそのような資源に妨害されずにやってくるのが許されなければならない。従って、ヒマス内での搾取や開発が禁止された。1960年代に数千のヒマスが開発目的に廃止されたが、近年のイスラム環境法の意識の高まりにより、この原則を復権し、残っているヒマスを再生させようとする努力が払われている。この動きはいまや他のイスラム地域、例えばインドネシアやザンジバルなどにも拡がりつつある。

ギニアの森林やサバンナ地帯では、伝統的信仰が村落の毎日の暮らしにまだ深く守られている。ここでは、いくつかの湖が地元社会にとって神聖であり、厳しい宗教的タブーや地元のルールが湿地資源の正しい利用を規定している。ワッサヤ湖では狩猟が禁止され、ごく短い漁期が許される。この湖のワニさえも神聖である。人が湖を見に行きたい場合はまず村の長老グループの許可を得なければならない。これらの信仰は現在にまで受け継がれており、これら森林の湿地環境の生態学的完全性の維持を助けている。

フランス南部、ローヌ川三角州のカマルグ地方は、キリスト教の聖母マリアを敬う古来よりの祭礼とその湿地や海で有名である。その主要な町サント・マリ・ドゥ・ラ・メールは聖母マリアの水とのつながりを祝ってその名が付けられた。ここでは毎年夏に、聖母像を三角州じゅうの各地へ運び、海に洗い、この地方の水と土地ならびに人々へのご加護を祝う。

湿地の神聖な価値が数世紀にもわたって

人間活動による妨害を受けずに残存することを可能にすることもある。標高4 - 5千メートルのチベット高原の西端にあるカシミール地方ラダック地区には多数の聖なる湖がある。地元の仏教徒の人々はたいへん尊び、その水域に入ろうとせず、そこから決して何も取らない。これらの湿地は、いくつかの鳥種の唯一の繁殖地となっており、独特の植物相と稀少な哺乳類を支える。

文化によっては、湿地の経済的価値や社会的、文化的、精神的価値を区別しないものもあり、そこでは人々は自分たちの世界をずっと全体的に展望する見方を持っているように思われる。オーストラリアの先住民たちは、自分たちを自然環境の統合的な一部とみなしている。人が住む大陸の中で最も土壌がやせていて、たいへん乾燥した気候条件の下で、オーストラリアの湿地環境の高い生産性は、彼らに特別な重要性を与えている。彼らにとってたいへん多くの場合に湿地が神聖である。例えば、大地を形づくり人々の必要性を満たすために施してくれた創造主の物語やその働きの形跡と考えられている。このような全体的な見方は、アフリカや南北アメリカの先住民の多くの信仰体系にも見られる。

人々と湿地の精神的な結びつきは長い歴史を持ち、そして多くの文化においてこんにちでもたいへん重要である。これらの信仰体系や伝統は湿地の文化遺産の重要な点であり、同時に多くの場合に湿地の保全と賢明な利用を確保する。



条約事務局連絡先：

The Ramsar Bureau
Rue Mauverney 28
CH-1196 Gland
Switzerland
Tel.: +41 22 999 0170
Fax: +41 22 999 0169
E-mail: ramsar@ramsar.org
Web site: <http://ramsar.org>

湿地 - 芸術や文学，民俗的着想

湿地は古来より，豊富な歌や音楽，踊り，芸術，文学，物語や祭礼などを生み出す人類の創造的な才能を刺激してきた。昔はたいいていの人々が湿地資源に依存しており，豊かな歌や物語，踊りなどが特に湿地に対する尊重や畏敬の念を集合的に表現するものとして口承されていた。そして多くの場合，伝統的な湿地管理慣習の維持を助けていた。このような伝統は，世界中で300万人と推定される先住民の少なくとも5千の異なる文化において，いまでも日々の暮らしに息づいている。

水や湿地は，いにしへの祭礼における重要な要素であり少なくともある程度は今日でも見られ

る。例えばタイの灯籠流し「ロイ・クラトーン」^{Loi Kratong}がある。人々はバナナの葉と色紙で形づくり，ろうそくや線香，花で飾ったクラトーンを水に対する畏敬の念とともに流す。同様の祭礼がラオスやミャンマーでも祝われる。中国のダイの人々が毎年祝う水の祭礼は子宝の恵みと幸運に関連する。鶴にまつわる祭礼は日本で数百年の歴史を持ち，冬越しに渡来した鶴を歓迎し，春はシベリアへ子育てのために飛び立つ鶴を祝福する。中国や日本の文化では，鶴は長寿のシンボルとされている。

古来よりの伝統がまだ多く実施されているとはいえず，すでに数世紀にわたって日々の暮らしにおいて湿地から物質的にずっと離れてしまった人もまた多くいる。そのような人々にとっても湿地は，ときには全く違った面で，まだまだ着想の源である。19世紀の二人の作家の湿地に対する異なる見方をみてみよう：

『汚れた下水 ... ぞっとするヨシ原 ... 人の足では到底横切ることができない ... 悪疫に満ちた大気』(R.ワーナー，1826年)

『色とりどりのさまざまな水生植物の花が，人里を離れ深遠で野生のこの地のいたるところに見られ ... 静寂に包まれ』(バッキンガムスミス，1847年)

湿地は，害悪や危険など不吉な場所と見られることもあれば，未曾有の自然美のありかと見られることもある。どちらの見方も芸術家や作家，詩人，音楽家などに着想を与える。

湿地やそこに生息する野生生物は，中国や日本の芸術家に数千年ものあいだ繰り返し画題にされてきた。こんにち平和に満ちた湿地の風景や湿地の生き物を描く筆画が広く評価されている。例えば，19世紀の著名な日本画家の狩野永岳。古代エジプトで最もよく知られたものの多くはナイル川の動植物相に着想した。西欧の風景画は

15世紀から20世紀初期にかけて，北部ではヨアヒム・パティニアや，アルブレヒト・デューラー，ヤーコブ・ファン・ロイスダールによって発展し，さらにヴェネツィアのカナレット(ジョバンニ・アントニオ・カナル)，のちにロマン主義に統合される英画家ジョセフ・マロード・ウィリアム・ターナーとジョン・コンスタブルなど，湖沼や沼沢地，河川を好んで画題にとりあげたものも見られる。フランス印象派のクロード・モネには，フランスのジヴェルニーの自宅に築いた池に生育する水生植物を描く一連の作品で彼の仕事を完成させた。こんにちまで，世界中の先住民芸術家たちも湿地をテーマにわくわくする作品をつくり上げている。



この絵は1999年5月にラムサール条約第7回締約国会議がコスタリカで開催された折りに描かれた。ニカラグアのコシボルカ湖南東部にあるソレンティナメ群島からの7名の先住民芸術家は，その湿地環境に密接につながる漁業と農耕の村に暮らしていた。彼らが締約国会議に来たのはIUCN中米が主催するプロジェクトの一環で，そのプロジェクトは中米各国の住民グループが集まり，彼らの暮らしにおける湿地の重要性を議論するものであった。その会合の成果として『中米の人々と湿地の宣言』がまとめられて，締約国会議に提出された(http://ramsar.org/cop7/cop7_declaration.htm)。そのプロジェクトの中で，ソレンティナメの芸術家たちに自分たちの湿地と人々との密接な関係を芸術表現することが提案され，彼らはその締約国会議のあいだにソレンティナメの環境をこの絵に描いた。この絵は締約国会議のちスイスの条約事務局の事務局長室に飾られている。

絵画: FERNANDO ALTAMIRANO, PAULA CLARISA ARELLANO, RODOLFO ARELLANO, SILVIA ARELLANO, GLORIA GUEVARA, ELBA JIMÉNEZ, ROSA PINEDA.

英文学では，たとえばチャールズ・ディケンズの古典「大いなる遺産」^{Great Expectations}のように，河口域を野性的でスリリングな，しかしまた荘厳な場所として描いている。ずっと穏やかな外観で安息の地やロマンスの舞台を演じるものもある，例えばダフネ・デュ・モーリアの「情炎の海」^{Frenchman's Creek}における湿

地の設定。湿地の「暗い」側面に作家や映画制作者が着想して、英雄の功業にとって危険な環境、あるいは犯罪のにおいのする不気味な舞台、超自然の舞台として沼沢地や湿地林が用いられることもある。西洋映画の古典C.S.フォレスト原作の「^{The African} ^{Queen}アフリカの女王」を見てみると、アフリカのビクトリア湖周辺がそのような舞台に用いられているのがその典型である。いくつかの湿地に与えられた名称にすら、人々の前に立ちふさがる湿地の性質がこめられている。たとえば、米国バージニア州南東部からノースカロライナ州北東部にかけてひろがるグレート・ディスマル湿地林（広大な荒涼たる湿地林の意）は、その著書に『ぞっとする不毛の地、終わることなくわきあがる汚い湿気が、大気を墮落させ息をするのもいやなくらいだ』と記したイギリスの探検家によって命名されたとも伝えられる。

湿原や泥炭地は北欧の一般的な湿地タイプで、この地域の人々にとって物語や伝説、祭礼の基盤にこの景観がある。現在でも地元の人々に着想を与えていることが湿原と泥炭地にまつわる短編コンテストに明らかである。このコンテストは1998年にフィンランド泥炭地協会が始めたもので、フィンランドだけでなくスウェーデンやカナダからも含めて1千に近い作品の応募があった。もちろん多くはその自然をテーマにしていたが、その湿地を舞台に犯罪やロマンス、戦争や超自然を扱ったフィクションも多数見られた。

3千年以上の昔のギリシャと小アジアでの宗教の起源には、ギリシャの神々とその功業の物語がギリシャ神話にまとめられ、文学や詩歌、芸術の豊かな源となった。ギリシャ神話における湿地は多くの場合に神々に関連する場所であり、いくつかのギリシャの神が、例えばアケロオスやアルピオスのような川をそのからだの一部に選んだ。神話のステュクス川はたぶん今日のアヘロン川と考えられているが、ハデス（冥界）と現世を区切る川として特に重要であった。口承ならびに記述された詩歌も、ギリシャ神話のシンボルや物語に芸術的形態を与え、2500年前のホメロスやヘシオドス、またアウグストゥス時代ローマ帝国の詩人オウィディウスのように、彼らのとてもわくわくする話に内陸の河川や沿岸域の舞台にうた

われる。

豊富な詩歌が湿地から着想している。それらの多くはその国の中で、あるいはその地方でしか知られていないこともあるが、湿地の文化遺産の力強い語り手の代表であり、湿地についての意識を高めることにたいへん貢献する。このような例にキューバの詩人エフライン・オタニョ・ヘラルドが挙げられる。彼はキューバのラムサール湿地サパタ湿地から着想し、湿地やその野生生物などについて数多く詩作している。近年作品が本にまとめられた。

驚嘆すべきほどたくさんの欧州のクラシック音楽が水や湿地をテーマにつくられている。ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデルは、例えば、水上で演奏するために組曲「水上の音楽」を作曲し、1715年にテムズ川に遊ぶイギリス王ジョージ1世のために演奏した。他にも、ベドルジハ・スメタナの「ヴルタヴァ」（またはドイツ語で「モルダウ」）、ゲオルク・フィリップ・テレマンの「ハンブルクの潮の満ち干」、エドワード・エルガーの連作歌曲「海の絵」イ長調、フランツ・シューベルトのピアノ五重奏曲イ長調「ます」、ピョートル・チャイコフスキーのバレエ「白鳥の湖」などが著名である。

近年には湿地に着想した「新たな」伝統が生まれている。たとえばシギチドリ類フェスティバルが米国とメキシコで過去10年間発展してきている。延べ箇所数で100以上の湿地で地元の人々と湿地への訪問者をひきつけてシギチドリ類の春の到着を祝っている。これは明日の文化遺産を築いているところだと言えよう。

これらの全ての場所で、湿地の舞台やそれに関わるものが、世界中のたいていの、たぶん全ての文化において、その芸術的遺産への重要な道筋に貢献している。ここに挙げた例はそのほんのさわりに過ぎない。湿地が大きな影響を与えるのは映像、口承、実演的芸術のすべてにわたり、それらは古典的な西洋の伝統だけでなく世界の全ての地域の国内的・地方的文化である。それらについてより理解を深め真価を認めるために、ますます研究が必要である。

条約事務局連絡先：

The Ramsar Bureau
Rue Mauverney 28
CH-1196 Gland
Switzerland
Tel.: +41 22 999 0170
Fax: +41 22 999 0169
E-mail: ramsar@ramsar.org
Web site: <http://ramsar.org>



湿地の文化遺産とラムサール条約

本情報集の他のシートからも明らかなように、文明の黎明期より、世界中の人々は湿地と密接にかかわって暮らしてきた。その天然資源を利用し、またさまざまな方法で水を管理してきた。この長年にわたる密接な関係が、おのこの世紀の社会の移り変わりとともに発展してきた文化的な強いつながりや構造の発達に結実してきた。水や湿地が、人々の暮らし方を長年にわたって決めてきたのである。

同様に、人々の湿地との伝統的なつながりが慣習や信仰を決定し、それらは現代の地元社会の姿勢にも影響を与え続けている。しかし世界の多くの場所で、このようなつながりが弱まってきている。それは、水や食物の安全保障を技術的に解決しようとする

ことが増え、また都市住民の数が増加することが広い範囲で湿地の悪化や喪失を招いているためである。残念なことに、多くの政策決定者や湿地の管理者はいまだもって、社会文化的側面が湿地の持続可能な維持管理に果たしうる役割ならびに果たさなければならぬ役割を十分に認識しておらず、一般にこの側面が湿地保全プログラムにこれまでほとんど考慮されていない。

ゆえに喜ばしいことは、近年ラムサール条約の締約

国が、湿地に関連する自然の価値と文化的価値の相互関係をよりいっそう理解し広く共有することの必要性を認めつつあることで

湿地の文化遺産11
 (ラムサール条約 2001年)
 和訳：琵琶湖ラムサール研究会 2005年

ある。締約国はまた、湿地や世界の文化遺産の管理者が共通な目標を追求するために協働する方法についての手引きを彼らに提供する必要性を理解するに至った。早くは1996年と97年にラムサール条約の科学技術検討委員会は、人間にとっての湿地の重要性の論点を条約の賢明な利用と管理の指針に組み込むべきことを主張した。1999年サンホセで採択された決議VII.8の附属書「湿地管理への地域社会及び先住民の参加を確立し強化するためのガイドライン」は、湿地の賢明な利用と管理における『先祖伝来の価値観、伝統的知識や慣習』の決定的な重要性に言及している。ラムサール条約の地中海湿地フォーラム委員会はすでに湿地管理者のための手引きを開発し始めており、2000年4月にチュニジアで開かれた同委員会会合で『地中海の湿地の文化的側面と湿地資源の持続可能な利用へのその貢献の可能性』についての技術的分科会が開かれた。この分科会で、条約のもとにさまざまな機関が拡大しまた発展することができるように基礎的な『指導原則』が見極められた。

「近年ラムサール条約は、湿地に関連する自然の価値と文化的価値の相互関係をよりいっそう理解し広く共有することの必要性を認めつつある。」

JAMIE SKINNER



ニジェール川内陸デルタに暮らすボゾの漁師。彼らにとって漁労が暮らし方のひとつであり、長い日々を家族全員で船の上に暮らして旅を続けることもある。

重要なことに、条約の常設委員会は『湿

地：水、生命及び文化』を第8回締約国会議のテーマに定め、『湿地の保全と持続可能な活用のためのツールとしての湿地の文化的側面』を扱う技術的分科会がこの締約国会議で開かれる。この分科会では、締約国会議の採択を目指して、手引きの文書案が議論され検討される。その手引きの案は、この資料に見てきたような基礎的な理解を配置し、湿地にかかる当局や管理者が、共通の一致した目標に向かって文化に関する機関や組織と国レベルや個々の湿地レベルでチームワークを奨励することができるような方法を推奨するものとなる。

その決議案と手引き案を準備するにあたって、ラムサール条約の関係機関は、湿地の自然の価値に関する経験や知識を動員して、資源管理の文化的側面にかかわる数多くの機関と協働している。欧州考古学評議会は、湿地考古学の文化的ならびに技術的側面について忠告し、同評議会がすでに採択した『湿地の遺産管理のための戦略』においてラムサール条約とのパートナーシップの増強と締約国会議への参加を約束している。この戦略は同評議会が2001年に出版した「欧州における湿地の遺産管理」に収録されており、同書は条約との協働の方法について追加提案もしている。スペインのパレンシア大学地中海湿地研究本部は地中海湿地フォーラムなどの条約の関係機関とさまざまな方法で密接に協働しており、英国信仰保全同盟や世界遺産条約も同様である。世界遺産条約は、その諮問機関であるIUCN - 国際自然保護連合、文化財保存修復研究国際センター、

国際記念物遺跡会議とともに「文化的景観の管理指針」(訳注・2005年9月時点で未刊)を策定するためにラムサール条約にかかる専門家とも議論を重ねている。この作業はラムサール条約の手引きにも反映される。

HUMEDALES



「湿地：水、生命及び文化」

ラムサール条約第8回締約国会議（パレンシア、スペイン、2002年11月18-26日）のロゴ

2002年の世界湿地の日は湿地管理者や湿地保全に熱心な人々が世界中で自分たちの湿地の文化遺産、また自然の価値とともにその文化的価値を管理するという重要な課題を見つめる機会を提供する。その活動に役立つ資料が各地でつくられることが期待され、それらをラムサール条約事務局に研究のために提供され、またひろく一般の人々が入手できるようにすることが期待されている。

条約事務局連絡先：

The Ramsar Bureau
Rue Mauverney 28
CH-1196 Gland
Switzerland
Tel.: +41 22 999 0170
Fax: +41 22 999 0169
E-mail: ramsar@ramsar.org
Web site: <http://ramsar.org>

